

武蔵野日曜集会

まことの光

——ヨハネ伝第1章1～18節——

1996年1月7日

これは自分が書いた本だよ 原始にみ言が在った 即神 神交 敬神 霊肉渾然 キリストと
一つ ビー・クリスチャン 不思議な神秘的な力

【ヨハネ1:1～18】（私訳）

1原始にみ言^{みことば}が在^あった。み言は神の許^{もと}に在^あった。み言は神であつた。2彼は原始に神の許^{もと}にあつた。3万物は彼に由^よつて成^なり、作^{つく}られたものにして、彼なしに成^なつたものはない。4彼には生命^{いのち}があつた。その生命は人々の光であつた。5そしてその光は闇に照^てる。然るに闇は彼を認めない。6神から遣^{つか}わされた人が現^{あら}れた。ヨハネという名^なの人が。7この人は証^{あかし}のために来^きた。彼は光について証^{あかし}をなし、万人が彼によつて信^{しん}ずるためにである。8彼は光ではなく、光について証^{あかし}するためであつた。

9彼は本当の光で、この世に来^きる万人を照^て破^はするものであつた。10彼は世の中にあつた。そして世は彼によつて造^{つく}られたのである。ところが世はそれに氣付^{きづ}かなかつた。11彼は彼の族^{やから}に來たのに、やからたちは彼を受け入れなかつた。12だが彼のみ名^なを信^{しん}ずる者^{もの}らには神の子^こらになる力^{ちから}を与^{たま}へた。13彼らは血^ちすじからでも、肉の意欲^{いきよく}からでも、人の意志^{いし}からでもなく、神のみ心^{こころ}から生^うまれた者^{もの}である。14さてみ言は肉となつた。そして彼は我^{われ}らの中に宿^{すく}つた。かくて我^{われ}らはその栄光^{えいこう}を見た。それは恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}に満^みちた父^{ちち}の独子^{ひとりご}の栄光である。15ヨハネは彼について証^{あかし}をなし、呼^よばわつて言う。「わたしのあとに來られる方は私に優^{すぐ}っている。わたしより前に実在^{じざい}して居^ゐられたからである」とわたしがかつて申^{まを}したのはこの人である。16我^{われ}らは皆その満^みちあふれた中^{なか}から受^うけて、恩恵^{めぐみ}に恩恵^{めぐみ}を増大^ふされる。17律法^{りつぽう}はモーセから与^{たま}へられ、恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}はイエス・キリストに由^よつて來臨^{らいりん}した。18未だ誰も神を見ていない。ただ父のみ懷^みに在^ある独子^{ひとりご}なる神のみがこれを体顯^{たいげん}した。

●これは自分が書いた本だよ

明けましておめでとうございます。どうぞ本年もよろしくお願いいたします。

私はヨハネ伝1章1節から18節を訳してみました。決定的な訳とは言いませんけれども、



大体そういうように訳してみたわけです。ギリシヤ語そのものよりも、我々の日本語の方が表現が豊かです。そして弾力性がある。日本語というのは素晴らしい。外国語にはそういう味がない。潤いと敬称的な言い方ができない。日本人は非常に情感が豊かです。

私は何々について語ることは嫌いなので、私はそれに即して告白する。「について」語ることは説明的、段階的な言い方になる。説明ではダメなので、我々は告白です。語る人も聞く人も、そういう気持が直接的でよろしいわけです。聖書と一緒に告白している。聖書について語るのでも説明するのでもない。

パウロを読めばパウロと一緒に、ヨハネを読めばヨハネと一緒になっている。そういう一如の世界でないと、私は本ものでないと思う。どうぞ、皆さんも聖書をお読みのこときは、

「これは自分が書いた本だよ」

というくらいに一つになつて読んでください。

「この意味はどうだこうだ」

なんていうことではない。聖書の筆者と一緒に告白している。そういう気持で読むのが、本当の聖書の読み方です。

日蓮が法華経を読むときの彼の精神はやはりそんなところにあつたらしい。さすがは日蓮だと思ふ。法然でも親鸞でも、一流の坊さんたちはやはりその原文と一つになっている。我々もその原文と一つになる。原文がなにもギリシヤ語でなくたっていい。日本語の訳文で一向差し支えない。

●原始にみ言が在った

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」

「太初に言が在った」という非常に面白い言い方です。私がもし訳せば、
「原始にみ言が在った。み言は神の許に在った。み言は神であつた。」

と訳します。「言は神であつた」とあるから、「言」に「み」を付けて「み言」と訳します。日本語というのは敬称的な表現ができる。外国語には敬称的な言い方がない。日本語というのは非常に潤いのある弾力性のある言葉で、私は日本語は世界第一の言葉ではないかと思ふくらいです。そういう味は外国にはない。「神と偕にある」という言い方は人格的・神格的ですから、

「原始にみ言が在った」

と私は訳します。

「言」はギリシヤ語では「ロゴス」ですけれども、

「み言は神と偕に在った」

というところははつきりと神格的な言い方です。「言」というのは我々が普通考える概念と



はちがう。だから、

「はじめにロゴスが在った」

と、そのまま訳してもいいくらいです。その「ロゴス」をただ「言」と訳したらダメなんだ。これは非常に内容の深いギリシヤ語で、神秘的な内容をもっている。

「原始にみ言が在った。み言は神と偕に在った。み言は神であつた」

というんですから、ただ「言」だけではどうもうまくない。どうしてもみの字をつけたい。そこが日本語のいいところではないですか。

●即神

「ロゴス」というのは不思議な言葉ですね、そういうように神格的に取り扱っている。サnder・シングが、

「結局、人はみな神さまに帰る。神と一つになる」

ということを言ってますが、正にその通りです。

「人は神の相に造られた」
すがた

と創世記にある。あれは「似姿」と訳してはダメです。

「神の相に即して造られた」

ということです。即神、神に即している。似ているのではない。即している。同質なんです。人間はもとと神と同質なんです。だから、人というのは本当は「靈止」と書く。神靈が止まっているのを「ひと」という。我々は本来は神の靈が止まっている。それがサタンの誘惑にかかって失樂園となつてしまった。

創世記第1章に、

「神光あれと言いたまひければ光ありき。」(創世記1:3)

とある。神の言は——「光あれ」と言ったら光があつたという——実言なんだ。実の言だから実現する。我々は聖書のみ言を体現する。身体で存在で現す。体現するためには、自分自身がその存在そのものにならなければダメなんです。

「ビー・クライスト」(キリストで在れ)

ということです。の如くではない。即するんです。即神です。

●神交

ところが、人間はパラダイス・ロスト(樂園喪失)でなかなか本当に即しない。それで一生懸命で

「信仰、信仰」

と言っている。

「信仰をもたなければダメです」



なんて。この「信仰」というのはダメなんだ。私は「信仰」という言葉は嫌いだ。もし「しんこう」と言うなら、「神交」です。神との交わりが本当の「しんこう」です。信じ仰いでいたのではダメです、神と一つにならなければ。キリストと一つにならなければ。これは一如の世界です。本当に友人を愛するのは、自分が友だか友が私だか分からないような、そういう境地が本当の

「友を愛する」

ということです。対象的ではなく、一つになってしまっているわけです。

2 彼は原始に神の許にあつた。

3 万物は彼に由つて成り、作られたものにして、彼なしに成つたものはない。

この「み言」というのは神格的・人格的な存在なんです。だから、「はじめに言あり」という訳ではダメなんだ。どうしても「み言」と言わないと。「それ」ではなく「彼」なんだ。この「み言」の实体はキリストです。

「み言が肉となつた」

とある。あの「肉」とはキリストのことです。キリストという実在になつた。キリストは神さまの現象体だから。我々自身はみなキリストの現象体でなければダメなんです。

「私はキリストと一つですよ」

と。パウロ自身がそうなんです、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と言つた。あのパウロさんと同じように、「われキリストのうちに、キリストわがうちに」というのが本当のキリスト者です。

「キリストを信じている」

なんていうのはダメなんです。「信仰」ではなく神交です。

「キリストという神と交わっている、神と一つになっている」

そうすると力が来ますよ、生命が光が来ますよ。一つにならなければダメなんだ。だから、我々はもう「信仰」なんていうのはやめだ。信じ仰いでいたつてダメなんだ。そういう今までの旧来概念を突き破つて進んで行かないとね。

●敬神

西郷南洲が「敬天愛人」と言つた。さすがは南洲だ。この「敬天」が今の日本になくなつてしまった。本当に「敬天」がなければ、本当の「愛人」、人を愛することはできない。「天」という言い方は、中国では絶対界を「天」という。もちろん霊的な天です。科学的な空間ではない。敬天は敬神と同じことです。敬天、敬神をしていると本当の人を愛することができるので、敬天のないものには愛することができない。この敬天の角度が今の日本人には非常にうすくなつてしまった。



今の政治家で、本当に神の前に平伏しているような政治家がいるかね。政治家でも実業家でも学者でも何でもかんでも、とにかく、この縦の絶対者との関係が魂にないのはダメなんだ。特に教育者がそうだけれども、そういうことのない教育者がいっぱいいるわけだ。日本の教育なんているのは信頼がもてない。

あなた方一人一人が全日本を背負っているような気持ちでやってください。キリストと一つになっていれば、何も恐いものはない。年齢のいかんにかかわらず、男と女のいかんにかかわらず、みなそうです。キリストは最大の勇者です。イエス・キリストは一番優しいひとで一番強い人です。

ひとのことはどうでもいい。大事なことは我々一人ひとりがキリストに直結していくことです。人真似はひとつも要らん。本当の人格というものは比較ができない。あなた方一人ひとりは絶対性をもっている。どうぞ、そういう気持で勇ましく楽しく生きてください。

●霊肉渾然

4 彼には生命があつた。その生命は人々の光であつた。

5 そしてその光は闇に照る。然るに闇は彼を認めない。

キリストはまことの光です。どんな闇の中でもキリストは我々一人ひとりの光です。

我々の存在はいろいろな恩によつて在らしめられている。自然界、歴史界、その環境、父母、いろいろある。自分で存在なんかしてやしない。私たちはみな恵みによつて生きている。だから、人に恵みを与えていかないと、天国へ行けなくなってしまう。ミルトンの詩の中にある。当然、天国に行けると思つて天国の門の所に来たら、

「ちよつと待て。お前は本当に人を愛したか。人助けを本当にしたか。人助けをし

ない人間は天国に行けないぞ」

と聞かれる。いわゆる「信仰」ではない。本当に人助けをして生きて来たか。どん底にあつて人を助けて生きて来たか。これが天国に入るか入らないかの、天国の門番の見当付けなんです。

「お前はキリストを信じていたか」

と、そんなことではない。「信仰」ではない。

「存在そのものが、行為そのものが、生き方そのものが本ものであつたか」

と、これだけのなしです。

「何を言つたか、何を書いたか」

でもない。

「まことに生きてきたか。人助けをして来たか」

ということ。 「人を愛する」とは

「人助けをする」



ということです。可愛がるということではない。

14 さてみ言は肉となった。そして彼は我らの中に宿った。かくて我らはその栄光を見た。それは恩恵と真理に満ちた父の独子ひとりごの栄光である。

我々と同じ存在のことを「肉」という。「肉体」という言い方はおかしい。肉体をもったところの存在そのものを「肉」という。

「肉」に対しては「霊」という。その肉がキリストの霊をいただいて、肉が同時にまた霊になる。霊肉いんじく渾然こんぜんでなくてはダメです。我々は霊肉渾然たるものです。分析する必要はない。我々の自然的存在が肉なんです。ところが、これが本当にキリストの生命をいただいていると、同時に霊なんです。肉であり霊である。本当のクリスチャンというものは霊肉渾然たる存在なんです。分析ではない。渾然として具体的なんだ。観念的でない。

●キリストと一つ

「我とキリストとは一つなり」

という、パウロのあの一つの世界です。パウロは何ものでもない。ところが、そのパウロが、「我とキリストは一つだ」と言う。全くキリストの中に入ってしまったている。

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

という世界です。私たち一人びとりが「われキリストのうちに、キリストわがうちに」という存在なんです。

「私はキリストを信じています」

なんていうのはダメです。

「私はキリストと一つです」

と、それでいい。

「信じていません。私は信仰なんかありません。キリストと一つですから」

と、それくらいいい方をして構わない。「信ずる」という言葉がかえって躓すまきになる。

「あなたは信仰があるんですか。信じていますか」

なんて言われたら、

「私は信じていません。キリストと一つです。信ずる必要はありません」

と言ってやりなさい。これが本当の世界です。

「私の中に生きていらつしやるキリストが見えないんですか」

という、分析のない渾然こんぜんたる一如の世界です。これは力がくる。生命がくる。光がくる。智慧も来る。とにかく、一つになっていなければダメなんです。

「キリストと一如ということ。信じてなんかいません」

と。これは楽でしょうがなくて、力が来でしょうがない。ありがたくてしょうがないとい



う世界です。一如の世界が一番大事です。

「私には信仰なんかありません」

と。もし「しんこう」と言うなら、「神交」と書く。

「私は神・キリストと霊的な交わりの中にあります。この破れ器の私の中にキリストがいらっしゃるのが見えませんか」

と、あなた方一人びとりが仰つて一向差し支えない。

「だけど、あんたは躓いたり転んだりしているではないか」

と言われたら、

「そうです。私は躓いたり転んだりしています。ところが、本当の内的な私というものはそんな現象とちがうんだ。現象の奥の根元の世界が見えないですか」

と、それだけのことを言つて差し支えない。人間というのはみな相対的な存在だから、相対性を見たつてはじまらない。

「本当の絶対界をもっているかどうか」

それだけのことはなしです。だから、

「いわゆる信仰なんて言いたくない。キリストと一つだ」ということです。

「私は相対的人間としては躓いたり転んだりする。そんなことは問題にしてません。

ところがどっこい、キリストと一つなので、絶対に滅びませんよ」

とはつきり言えなくては。

「だけでも、お前はダメではないかと。」

「ええ、ダメで結構です」

と。お互いに人間は五十歩百歩で、相対的なものをどうだと言つたつて、そんなことは始まらない。

●ビー・クリスチャン

普通は「信仰、信仰」と言つて、なにか「信仰」がサムシングであるようなのは冗談ではない。私は何もありませんと言う。無です。無者です。無者が無限無量者になる。無限無量とは量的ではない。質的です。我々は質的に無限無量なんです。相対現実では破れ器で、かけらではない。

ルッターは

「聖書はかけらだ」

と言つた。神さまの言はこんな聖書一卷に盛りきれるか、盛りきれはしないぞと。これはヨハネ伝の終りの方に書いてある。



「イエスの行い給いし事は、この外なお多し、もし一つ一つ録しるさば、我おもうに世界もその録すところの書を載のするに耐えざらん。」(ヨハネ21・25)

と、大変なことが書いてある。本当はこの言い方はあまり感心しない。そんな量的なはなしではなく、質的なんです。

「汝ら是我よりも大なる業をなす」

とキリストが言われたのは、

「汝らは、私がお前の中に入るから、もつと大きなことをやるよ。私がお前の中に入つて大いにやるよ」

ということ。霊の世界の神秘性というものは頭で割り切れるような世界ではない。

ユダヤ人はキリストを受けとらなかった。

「あれは新興宗教だ」

といって、どこまでもユダヤ教に固執している。福音を受けとらない。どこまでも

「モーセ、モーセ」

と言っている。キリストを受けとったのは本当の弟子たち、ペテロ、ヨハネ、パウロ、それからキリスト道の歴史の中の——名のある人も名のない人もそんなことは関係ない——我々一人びとります。

「私はキリストの証者です」

とはつきり言えるわけです。死んでも死なない生命が在ることが証人あかしびとなんですよ。

「どういう行為をして証をしたか」

ということではない。本質的に、存在的に「在る」ということが大事です。

「ドゥー・クリスチャン」ではなく、「ビー・クリスチャン」です。「在る」という存在が大事なんです。まず存在(ビー)していなければ、本当の行為(ドゥー)は出てこない。ところが、普通は行為ばかり考えている。

ゲーテが『ファウスト』の中でヨハネ伝の最初のところを

「初めに言があつた」

ではなく、

「初めに行為があつた」

と訳した。大事なのは行為であつて、行為に裏付けられない言葉というものは意味がないという。さすがはゲーテだと思つたけれども、行為の奥には「存在」がなければ、本当の行為は出てこない。

「その人が存在しているだけで、何かしらんけれども平安がくる、力が来る、光がくる、愛がくる」

というような存在。それが本当の存在です。現象ではない。本当の存在が本当の現象を現してくるので、始めから現象を問題にしていたらダメなんです。だから、ビー・クリスチ



ヤンであることが大事です。

●不思議な神秘的な力

¹⁴ さてみ言は肉となった。そして彼は我らの中に宿った。かくて我らはその栄光を見た。それは恩恵と真理に満ちた父の独子ひとりごの栄光である。

イエス・キリストというのは大変なひとです。全くの例外者です。マリヤにはヨセフという夫がいたけれども、ヨセフとの交わりで出てきたのではない。マリヤから聖霊の力でイエスが生まれたのだから。これは大変なことだ。だから、イエスは全く神の子なんです。彼はもちろん普通の人間と同じ生き方をした。けれども、彼は人助けをして死人をも甦らせるような霊的な力をもっていた。息子が亡くなつて柩のそばでお母さんが悲しんで泣いていると、イエスは柩に手をおいて

「起きよ！」

と言つたら、死人が甦つてきた。それでびつくりしてしまった。そういう人だからね、キリストというのは。

だから、我々はキリストと一つになると、何だかしらないけれども、そういう不思議な神秘的な力がやってくる。皆さんも自分で体験なされば、お分かりになる。いわゆる信仰ではない。キリストさまと一つになっている。キリストの中に自分を投げ入れている。

「ありがとうございます」

と言つて、平伏してキリストの中に入つてしまつてごらん下さい。これはありがたくて力が来てしょうがない。疲れを知らない人になる。イザヤ書40章の言葉に、

「²⁹ 疲れたるものには力をあたえ、勢力なきものには強きをまし加えたもう。

³⁰ 年少きものもつかれてうみ、^{さか} 壮なるものも衰えおとろう。³¹ 然しかはあれど

もエホバを俟望まちのぞむものは新なる力をえん。また鷺のごとく翼をはりてのぼら

ん。走れどもつかれず、歩めども倦うざるべし。」(イザヤ40・29～31)

とある。「俟望まちのぞむ」というのは、「信賴する」という意味です。このヘブライ語はもともと「帰り行く(シューブ)」という言葉です。

「エホバに帰り行く者は新あらたなる力をえん」

ということ、待つて望んでいるのではない。

聖書は大変な本です。聖書くらい面白い本はない。こんな楽しい本はない。

「聖書は難しい」

なんて言つてはダメですよ。これは楽しい本なんだ。力が来て、ありがたくてしょうがない。また今年もそういうことで楽しくやつていきましょう。

